

地域みな様と、私たちがむすぶ広報誌



京都中部総合医療センター

Kyoto Chubu Medical Center



CONTENTS

- 院長挨拶 ①
- 人工膝関節ロボット支援下手術 ②
- 診療科紹介 総合診療科 ③

- 南丹医療圏での当院の活動 ④
- 地域の救急医療について ⑥
- がんサロン
(パインツリー) について ⑥
- 令和6年
能登半島地震 DMAT 活動報告 ⑦

- 京都中部総合医療センター
看護専門学校 ⑨
- 第61回
全国自治体病院学会優秀演題選出 ⑩
- 第20回日本医療マネジメント学会
京滋支部学術集会 ⑩

地域医療支援病院 紹介受診重点医療機関 臨床研修病院
救急告示病院 日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療病院 第二種感染症指定医療機関
地域周産期母子医療センター へき地医療拠点病院
京都府地域リハビリテーション支援センター
京都府災害拠点病院(地域災害医療センター)
DMAT 指定医療機関 認知症疾患医療センター
エイズ拠点病院 京都府難病医療協力病院

京都中部総合医療センター

〒629-0197 京都府南丹市八木町八木上野25番地
TEL 0771-42-2510代 FAX 0771-42-2096

<https://www.kyoto-chubumedc.or.jp>





2024.1
Vol.60
新春号

病院の理念

地域の拠点病院として、患者さん中心の良質な医療を行い、地域に愛され信頼される病院を目指す。

病院の基本方針

- 常に患者さんの立場にたち、権利を尊重して適切な医療を行います。
- 地域医療支援病院として、地域の医療・介護・福祉等と連携しながら、専門診療を推進して地域完結型医療の中心的役割を担います。
- 第二種感染症指定医療機関として、二類感染症もしくはは新型インフルエンザ等感染症に対応した医療を提供します。
- 救急医療、周産期・小児医療、災害医療を充実させ、いつでも安心して受けられる医療を提供します。
- 地域がん診療病院として、集学的医療を推進し、高度ながん医療を行います。
- 働き方改革を推進するとともに、チーム医療を強化し、医療の質・安全性を高めるため、すべての職員の資質向上に努めます。
- 公営企業としての役割を全うするため、経営効率を高め、健全経営を遂行します。

患者さんの権利と責務

私たちは患者さまの権利を尊重し、十分な説明と合意に基づいた医療を行います。

- 説明を受ける権利
- 治療を選択する権利
- 情報を知る権利
- 個人情報の保護を受ける権利
- 自分の健康情報を正確に提供する責務
- 説明を理解するまで問う責務
- 病院での規則に従う責務



院長挨拶

辰年に期待を込めて ～災害に強い地域を目指して～

院長 たつみ てつや 辰巳 哲也



このたび2024年1月1日に発生しました能登半島地震において、お亡くなりになられた方々に深甚なる哀悼の意を表しますとともに、被災されたすべての皆さまに心からのお見舞いを申し上げます。元日の夕方に生じた今回の地震はマグニチュード7.6を記録し、石川県内の志賀町、輪島市、七尾市、珠洲市、穴水町、能登町などで震度6強の揺れを記録しました。1月31日現在で石川県内における死者は238人、重軽傷者数1,179人、住宅被害8,614棟、避難者数16,000人以上と報告されています。

連日報道されていますように、今回の地震では奥能登までの道路が損壊し、土砂崩れも生じました。さらに能登半島北部沿岸の広い範囲で、地盤が隆起し漁港が使えなくなることで様々な交通路が寸断され、電気・水道などライフラインの復旧にかなりの困難を要しています。倒壊した建物の復旧の目途も立たず、断水が長期化する地域が未だ多く存在し、現地で暮らされている地元住民への支援が進まないなど、今回の地震災害特有の課題も見えてきました。

当院は災害拠点病院として1月4日より石川県へDMAT隊の派遣を延べ3回行ってきました。被災された超高齢者の方々の健康把握とトリアージ業務を行いながら、まん延する感染症への対策に追われた業務内容でした。DMAT隊が赴任した石川県立中央病院の岡田俊英院長は私の友人でもあり、心からのお見舞いとエールを送りたい気持ちです。職員の詳しい活動報告は今月号に掲載していますので是非ご一読ください。約4年間続いたコロナ禍もようやく収束の兆しを見せてきた中で生じた大規模災害であり、医療機関はもちろんのこと国を挙げての長期的な支援体制の必要性を感じております。

地震大国といわれている日本ですが、京都府における地震・津波による被害想定調査も公表されており、亀岡市や南丹市に係る花折断層帯、西山断層帯、埴生断層などで震度6～7の地震が生じた際の人的・建物被害も推計されています。また、地球温暖化による水害やコロナを含めた感染症被害は今や常態化の感があります。一つとして同じ災害はないとは言え、課題ごとにシミュレーションを駆使して平時から対策を練りたいものです。幸いにも亀岡市・船井医師会の先生方の災害対策への関心は高く、できれば行政や消防署の方々とも水平連携した災害訓練を是非行ってみたいと考えています。

京都中部総合医療センターの新棟整備プロジェクトは、令和5年度は「基本設計」からさらに詳細な設計図である「実施設計」を練り直している段階です。建築物価の高騰や資材不足、さらに看護師等の深刻な人材不足など課題は山積しています。特に看護師不足問題はいずれ南丹医療圏全体の大きな問題になることが予想されます。構成市町への応援を要請するとともに病院を挙げて看護師募集を行ってまいりますので、少しでも身近にご推薦いただける方がいらっしゃいましたら、是非ともご紹介ください。

辰年は自然万物が振動し、草木が成長して活力が旺盛になる年だといわれています。「辰」は十二支中のただ一つ実在しない神話上の動物です。辰は「竜」とも呼べて、その名のとおり力あふれ活気づく年になることを祈りたいと思います。新たな令和6年が皆さまにとって活気あふれる飛躍と繁栄の一年になりますように、心からお祈りいたしております。今年もどうか宜しくお願い申し上げます。

人工膝関節ロボット支援下手術

むらかみ こうじ
整形外科部長 村上 幸治

変形性膝関節症は中高年の膝関節痛の代表的な原因疾患であり、日本国内の潜在患者数は3000万人にもおよぶと推測されています。主に膝関節の軟骨がすり減ってしまうことによって生じ、進行すると疼痛のため日常生活に支障がでてきます。保存療法（投薬、関節内注射、リハビリテーションなど）でも症状の改善がみられない場合、人工膝関節手術が必要になることも少なくありません。人工膝関節手術は、患者さんの傷んだ骨や軟骨を部分的に削って金属やポリエチレンなどのインプラントに置き換える手術で、国内での手術件数は年間およそ10万件とも言われています。

人工膝関節手術において良好な成績を得るためには、予定したとおりに正確に骨を削ること、そして膝の靭帯バランスの調整が非常に重要になってきます。従来から正確な骨切りを行うために、ナビゲーション支援手術や患者固有の骨形状に合わせて作成したオーダーメイド骨切りガイド（PSI）を使用した手術が行われてきましたが、近年では手術支援ロボットの開発が進み、導入する病院も徐々に増えてきました。

当院では2022年11月から人工膝関節支援ロボット CORI（Core of Real Intelligence）Surgical System（Smith&Nephew 社製）を導入しており、当院で人工膝関節手術を受ける患者さんも増えてきています。

人工膝関節ロボット支援下手術では、ロボット用に開発された高性能赤外線カメラを使用して患者さんの骨の形状と膝関節の靭帯バランスの情報を取り込みます。取り込んだ情報をもとに膝関節の3Dモデルや断層像が作成され、それらの画像を用いてタッチパネルモニター上で0.5度、0.5mm単位で骨切りの設定を行うと、仮想のインプラントを設置した状態で予測される靭帯バランスが表示されます。表示されたデータをもとに必要に応じてさらにタッチパネルモニター上で微調整を行い、設定が完了すれば赤外線反射マーカーが取り付けられた専用のロボティックドリルで実際に骨を削ります。ロボティックドリルの先端が予定した骨の深さまで到達すると自動でドリルの回転が止まるため、誤って骨を削りすぎてしまうことはありません。

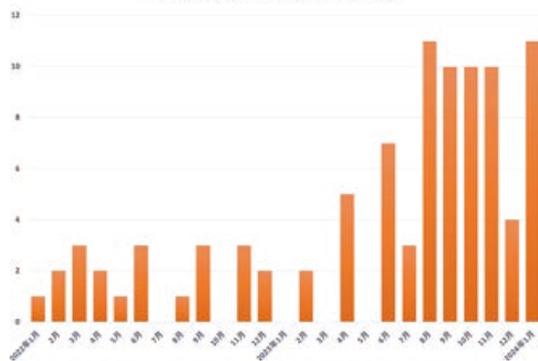
骨を削った後に仮のインプラントを設置して実際の靭帯バランスなどの評価を行います。これまでの手術では膝を完全に伸ばした状態と90度曲げた状態の靭帯バランスだけで評価していましたが、支援ロボットを使用することで全可動域での靭帯バランスをリアルタイムで評価することが可能となり、追加の微調整も容易に行えます。

ロボット支援下手術とは言っても『ロボットが自動で手術を行う』わけではなく、手術中に骨切りの設定を行ったり、実際に骨を削ったりするのはあくまでも術者です。しかし『ロボットシステムの支援』を受けることで、より精度の高い手術が行なえるようになりました。

これまでも人工膝関節手術の術後成績は一般的に良好であると言われていましたが、手術支援ロボットを使用することで、これまで以上に良好な術後成績が期待できると考えています。



当院の人工膝関節手術件数



総合診療科

Department of General Medicine

総合診療科 副部長 こもり まい 小森 麻衣

当科は、2022年10月に総合診療専門医の武田拓磨先生を新たな仲間を迎え2人体制となり、前身の総合内科から総合診療科と名称を改めました。これまでの当院総合内科の「人を総合的に診療していく視点を大切にする」という精神を引き継ぎ、より多くの地域の皆様の健康を守るため、日々診療に努めています。

総合診療科では、様々な症状を訴えられる患者さんに対して初期診療を行い、専門的な治療が必要な場合は専門医に紹介しています。専門的な診療を必要としない場合や、複数の専門科での治療を必要とする場合は、各診療科と協力しながら当科で担当させていただくこともあります。いずれにしても、疾患臓器にかかわらず、患者さんが適切な医療を受けられるように尽力することを、当科の基本方針としています。

診療と並行して力を入れているのが、医学生や臨床研修医の教育です。医学生には、病気を単なる生物学的な問題としてではなく、心理的、社会的背景も重要な要因として捉え、症例検討会を通じて、各々の問題に対する具体的なアプローチを考えることの重要性を教えています。臨床研修医教育では、外来でよく遭遇する疾患や症状から診断に難渋する疾患まで、カンファレンスで取り上げています。

また、世界で最も広く読まれ、影響を与えている医学雑誌（The New England Journal of Medicine）に掲載された症例呈示記事を読み解く勉強会を定期的を開催し、希望者には、外国人講師との症例記事に関する英語でのディスカッションの場を設け、診断力はもちろん、英語での発信力向上も目指すなど、今後の社会から必要とされる医師へ成長するよう支援しています。

患者さんから病気や健康に関する貴重な教訓を学ぶことは多く、これらを通してより良い医療を提供できるように、そして微力ながらも、診療と教育の両面で南丹医療圏における医療の支えとなるよう努めております。どうぞお気軽にご自身やご家族の健康についてご相談ください。



南丹医療圏での当院の活動

感染対策の地域との取組

感染対策チーム 感染管理認定看護師 しばた なみ 柴田 奈美

当院は感染対策向上加算1を届け出ており、南丹保健所や感染対策向上加算2や感染対策向上加算3を届け出ている病院や外来感染対策向上加算を届け出ている診療所と連携しています。年に1回新興感染症発生時対応のための訓練、年に4回院内感染対策や感染症情報共有の合同会議、連携施設の院内感染対策に関して評価と助言を行い、南丹医療圏での感染対策向上に努めています。

私達は、京都府新型コロナウイルス感染症施設内感染専門サポートチームの一員として活動をしています。高齢者施設や障害者施設へ赴き、新型コロナウイルス感染症が施設内で感染拡大しないよう感染対策の助言や指導、感染対策に必要な手指衛生、個人防護具の使用法、換気など感染対策のレベルアップができるよう施設内で研修をおこなっています。

一人ひとりの感染対策はとても大切です。そのうえで地域全体が感染対策に取り組んでいく必要があります。まずは感染対策の基本の手指衛生を怠ることなく、感染拡大の防止に努めていきましょう。



蛍光塗料を用いた、
手洗い後の洗い残しの確認



感染防護服の着脱指導

医療安全の地域との取組

医療安全管理室室長 やました さやか 山下 さやか

平成30年度診療報酬改定において、医療安全に関する医療機関の連携に対する評価として「医療安全対策地域連携加算」が新設されました。

「医療安全相互ラウンド」は、地域の各病院における医療安全対策の現状について病院間で意見交換及び評価を実施し、医療安全対策の標準化を推進するとともに、医療安全の質の向上と均てん化を図ることを目的としています。

自己評価と他者評価を実施することにより、次のような効果が期待されます。

- ・医療安全対策における自施設の課題が明確になる
- ・他施設の先進的取り組みを参照できる
- ・評価する側及び評価を受ける側の医療安全に対する意識が高まる
- ・相互ラウンド実施後も相互の連携体制を維持し、助言や意見交換が行える

毎年、10月から12月にかけて京都府の丹後及び中丹医療圏の加算1連携病院との相互ラウンド、加算2病院への訪問評価を行っています。訪問先は当院を含め連携4病院（綾部市立病院、京都府立医科大学附属北部医療センター、市立福知山市民病院）より5月頃に医療安全地域ネットワーク会議において決定します。訪問者は医師、看護師、コメディカル、事務職員で構成されています。今年度、加算1ラウンドは京都府立医科大学附属北部医療センターへ約1時間の道のりを経て、初めて相互ラウンドを行いました。コロナ禍以降、制限のない院内ラウンドは久々でした。助言



や意見交換を通しての医療安全対策に対する双方の熱い思いは2時間では足りないほどでした。また、当院へのラウンドの際は日ごろの取り組みを第三者に評価いただくことで医療安全対策に携わる職員もさらにモチベーションが上がるとともに、新たな課題に気持ちも引き締まりました。

加算2ラウンドでは、亀岡市立病院、明治国際医療大学附属病院へ訪問させていただきました。

近隣の病院との連携は医療安全対策の取り組みの評価や意見交換を通して安全対策の質が毎年向上していることを実感しています。

相互ラウンドに加えて京都丹後及び中丹・南丹医療圏の医療安全管理者が参加する「つどい亭」があります。つどい亭では、医療安全管理者の活動報告や相談、勉強会などをオンラインで開催しています。病院を越えて地域の安全管理者同士が顔の見える関係で学び合い、情報共有できる場は大きな支えとなっています。今後も、地域の医療機関と密に連携を行い医療安全文化の醸成に取り組んでいきたいと思えます。

糖尿病に関する地域への取り組み

看護師長 京都府糖尿病療養指導士 まつおか みよこ 松岡 美代子

当院の糖尿病委員会は医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、事務職員で構成されています。今回は糖尿病委員会が、院内ではなく南丹医療圏に住んでおられる方々に対して取り組んでいることについてお話しさせていただきます。

糖尿病は文字の通り尿に糖が出ることで発見される病気ですが、この名前から偏見もあり自分が糖尿病であることを隠したり、逆に就労制限などが未だにあります。インスリンを使用している子供達への理解不足も問題になっています。このことは世界全体で問題となっており、糖尿病委員会でも世界糖尿病デーにブルーライトアップなどのイベントを開催して糖尿病への正しい理解を呼びかけています〈写真1〉。世界糖尿病デーでは地域の方にも病院に来ていただいて糖尿病について知っていただく催しをしています〈写真2〉。また、地域で行われるイベントに参加をして、血糖測定や相談会などを実施し、糖尿病のことを知っていただく機会を設けました。なんと150人もの方が血糖測定に来て下さいました。



写真1 (令和4年度のライトアップ)

また、地域の医院や病院とも連携し、血糖コントロールや糖尿病教育、合併症が無いかなどを調べるための短期間入院なども受け入れています。住み慣れた地域でかかりつけ医にかかりながら安心して生活していただけるように普段のつながりが、大切です。これは、急な入院時にもスムーズな対応や安心へと繋がります。



写真2 (糖尿病デーイベント)

糖尿病は成人だけの病気ではなく、小児も発症します。特に小児は突然発症することが多く、保育園児であっても小学生であっても血糖測定やインスリン注射が一生必要になる場合もあります。退院にあたっては小児科外来と保育園や学校の先生と連携し、糖尿病を持つ子供達が安全に、他の子供達と同じように学校生活を送れるように調整することが大切です。

地域のために委員会の中だけでできることは多くありません。地域の医療機関のスタッフとも同じ目的を持った仲間として勉強会を開催したり意見交換をしたりしていますが、今後は中丹医療圏へと拡大を目指しています。これからも地域の方々の健康のために何ができるかを模索しながら活動していきたいと思えます。



糖尿病委員会

地域の救急医療について

救急部長（外科系） いわた じょうじ 岩田 譲司

当院は、京都府の南丹医療圏の救急医療、災害医療、周産期医療、小児救急医療を含む小児医療の基幹病院として、急性期医療の拠点病院であり、救急診療の依頼は原則として全例受け入れる方針としています。また近隣の医療圏への距離を鑑み、いわゆる 2.5 次救急医療を担える立場として頑張っております。

三次救急医療を要する症例は、京都市内の救命救急センターに転送する場合があります。この場合、自院の救急搬送車や京都中部広域消防組合の救急車、必要時にはドクターヘリ（日没後は京都市消防ヘリ）などに依頼し、遅滞なく患者さんに必要な治療を受けていただく体制をとっています。

京都中部広域消防組合とは、3ヶ月に一度、救急搬送事例に関する検討会（救急フォーラム）をオンラインで開催しており（コロナ禍の前は対面形式）、2月16日の救急フォーラムにおいては、当院DMAT、消防からそれぞれ石川県に出務して活動した内容の報告会を行い、情報共有をしました。各々の立場での活動内容が理解できたよい機会でありました。

また当院内科系の救急部長でもある計良夏哉副院長と共に、南丹MC（メディカルコントロール）のメンバーであります。業務としては、救急搬送された事例に対する報告書（救急活動検証票）を定期的にチェックし、救急活動内容が適切であったか、若しくは、適切に救命士の特定行為が行われており推奨される活動であったなどと評価し、フィードバックするものです。我々もこの内容を精査することで、例えば、コロナ禍の最中に、搬送先の病院選定に10件以上の医療機関に受け入れを断られて苦勞した現実や、傷病者に接触した救急隊員が早期の高度医療を必要とすると判断した場合にドクターヘリを要請したり、普段の救急活動内容を具体的に知るよい機会となります。

また、定期的に南丹MC協議会に参加し、先に述べました救急活動検証票の中の一部を協議したり、救急活動のテキストとなるプロトコルの内容の改善点の提起などをさせていただいています。

今後も急性期医療の拠点病院として、また地域災害拠点病院として、京都中部広域消防組合と共に地域の救急医療に貢献して参りたいと考えております。

がんサロン（パインツリー）について

がん相談支援センター・緩和ケアチーム 緩和ケア認定看護師 うすい ひろこ 碓井 寛子

京都丹波がんサロン（パインツリー）は、京都府の亀岡市、南丹市、京丹波町に暮らすがん患者さんやご家族で結成され、2011年10月南丹医療圏に初めて、がん患者さんやご家族の交流できる場として発足しました。がんサロンは月に一度、十数人が集い、当院第2病棟5階「憩いの場」で、がんに関する悩みや不安、自らの体験を語り合い、情報交換をしています。がんサロンには、当院の緩和ケアチームの医師や看護師も参加し、がん患者さんやご家族と交流をしていました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2020年から休止していましたが、昨年6月から3年ぶりに再開しました。参加者は、「久しぶりに元気な顔が見れて嬉しかった」「話せてよかった」と、対面で語り合えることを喜んでおられ、とても嬉しく感じました。

現在も、毎月第2月曜日の14時からサロンを開いています。がんの種類は問わず、当院のかかりつけでなくても誰でも無料で参加いただけます。これからも患者さん同士やご家族同士が支え合いながら、心穏やかな日々が過ごせるように、皆さまと一緒に歩んでいきたいと思っております。お気軽にご参加ください。



京都丹波がんサロン
パインツリーのご案内

がん患者さんやご家族などが、同じ立場で心の悩みや体験などを語りあう場です。初めての方も大歓迎です。一度がんサロンに参加してみませんか。

時間：毎月第2月曜日 14時から
場所：京都中部総合医療センター 第2病棟5階「憩いの場」

詳しい場所やお問い合わせは下記までご連絡ください。

連絡先
がん相談支援センター
電話：0771-42-2510（代）

京都中部総合医療センター 緩和ケアチーム

令和6年能登半島地震 DMAT 活動報告

令和6年1月1日16時10分、最大震度7の能登半島地震が起きました。この地震により、犠牲となられた方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災されたすべての方々に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地の皆様の生活の復旧をお祈り致します。当院からもDMAT（災害派遣医療チーム）が1月4日から1月7日、1月12日から1月16日、1月24日から1月28日の合計3隊が現地に出務しました。各隊の現地での活動を報告いたします。

第1隊活動報告

医師 いわた じょうじ
岩田 譲司

令和6年1月1日16時10分、広い救急室の床がゆっくり波打つような数分間に及ぶ揺れを感じました。病院内の被害状況を直ちに確認しましたが特に診療業務への障害はなく、入院患者さんにも実害はなかったことを確認しました。最初はどこが震源かも判りませんでしたので、救急室のTVで現状を把握しました。

1月4日に辰巳哲也院長の命令を受けて、医師岩田、看護師野村・中村、業務調整員塩貝、深見の5名が病院救急車で午前9時44分に病院を出発し、石川中央DMAT活動拠点本部が設けられている石川県立中央病院の本部に到着しました。現地では3階のリハビリテーションセンターが活動拠点本部になっており、リハビリテーションを受けられる患者さんは実施する場所を変更されていました。

現地での活動としては、中村看護師、塩貝業務調整員は、夜間の搬送調整等の対応のため夜勤業務を遂行してくれました。残りの3名は、現地の医療受入体制の調査や転院搬送の調整やEMIS（広域災害救急医療情報システム）入力により情報共有を行っていました。病院にて後方支援していただいたDMATメンバーにも感謝致します。避難所を含め、現地の皆さんの健康状態の維持をお祈り申し上げます。そして、我々が活動した金沢市内ではライフラインは保たれていましたが、被害が大きくアクセス困難となっている半島北部の輪島や珠洲地区の被災者を含め、皆様のご無事と地域の早期復旧を願って止みません。



第2隊活動報告

業務調整員 たなか ゆうじ
田中 裕詞

第2隊は、石川中央DMAT活動拠点本部に参集後、石川県立中央病院のMCC（Medical Check Center）での活動を拝命しました。

活動開始時（発災から13日目）の現状として、長引くライフラインの寸断（特に断水）は、医療だけでなく介護・福祉サービスにも深刻な影響を及ぼし、避難を決めた病院からの転院だけでなく、様々な施設や避難所からも金沢市への搬送が行われていました。被災された方々は転院先や避難先が決まらないまま空路や陸路で出発されることがほとんどでした。大規模な移動ですので、一旦ライフラインの正常な地域へ搬送してから収容先を決めるという方針で、とにかく空路、陸路問わず搬送手段が整い次第、順次出発していました。そして、その受け皿の役割を担っていたのが石川県の基幹災害拠点病院で

ある石川県立中央病院です。

中でもその実務の中心となっていたのがMCCです。MCCの任務は主に診療と搬送調整でした。診療チームは、被災地の介護・福祉施設や避難所からの搬送者のメディカルチェックや、収容先がその日に決まらなかった方々が一晚MCCで過ごされる際の介助・見守りに対応しました。搬送調整では、被災入院患者の転院先調整とメディカルチェックを終えた施設利用者等の搬送先調整を行いました。陸路では4から6時間の移動となったので、到着される前に搬送先を調整し、可能な限り直行してもらいました。それがMCCの負担軽減、ひいては石川県立中央病院の負担軽減に繋がったと考えています。

私個人は、これまで訓練には参加してきましたが、今回が初めての実災害派遣でした。大変な活動でしたが、他府県のチームと協力しながら無事に任務を遂行できたことにほっとしています。反省点もありますが、それ以上に多くのことを学びました。ひとつのチームが活動期間を終えてもまた別のチームが引継ぎ支援を続けています。被災地には未だ多くの方々が避難生活を強いられており、一日も早い復興を願うとともに、我々の活動がその一助を担えていれば幸いに思います。



第3隊活動報告

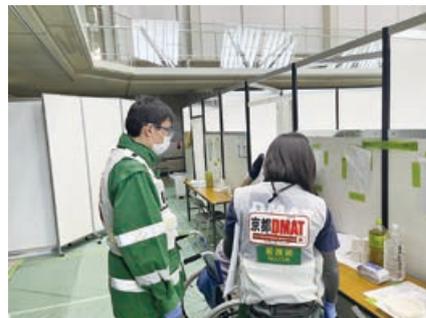
看護師 しおがい まき
塩貝 麻紀

出勤当日は大雪のため予定していたルートの舞鶴若狭道や北陸自動車道が一部通行止めとなっており、現地に到着するためのルートを探しながら向かいました。翌日の1月25日から1月28日の4日間、私たちは金沢市にある総合スポーツセンターで患者搬送業務を命じられました。総合スポーツセンター（一時待機ステーション）は能登半島などで被災した高齢者施設から避難して来た方や医療機関での治療が終了した方の一時的な待機場所・避難所となっていました。

活動内容としては、医師は発熱・嘔吐・酸素化不良者など、状態が悪化した入所者の診察を行い、看護師は入所者約70名の健康観察（検温や血圧測定など）を行い、業務調整員は入退所者の受付業務や業務引継のために資料作成を主に行いました。医師が診察し、病院での治療が必要と判断された入所者はDMATが近隣の病院へ搬送します。看護師は患者の状態を観察し移送方法（ストレッチャーか座位保持が可能なのか）を検討しながら、荷物の整理や退所準備を行ないます。業務調整員は書類の手続きや搬送先への連絡を行ない、入所者を病院へ搬送しました。他府県からもDMATが参集しておりお互いに協力しながら業務に当たりました。

入所者の食事や排泄介助は主にDWAT（災害福祉支援チーム）が行っていました。またDMATやDWATだけではなく災害支援ナースや日本医療ソーシャルワーカー協会やDPAT（災害派遣精神医療チーム）、薬剤師会など多くの業種で被災地を支えていることを今回の活動を通して知ることができました。私たちが行った業務はほんの一部であり、数日間に過ぎません。被災地の復興への道のりは長く続きますが多職種協同での支援が継続して行われることが重要となります。

現地での活動は、慣れない環境下で悪戦苦闘することも多々ありましたが、多くの学びもありました。当院にて後方支援を行っていただいた方々の支えのおかげ無事に任務を遂行することができました。みなさまには心より感謝申し上げます。



地域保健活動からの学び

1年生 たかはし りり
高橋 莉々

地域・在宅看護論の授業で地域保健活動に参加しました。健康を維持するためのクイズやお話をしながら楽しく運動をしたり、握力測定を一緒に行ない健康を保つための取り組みの必要性や大切さを学ぶことができました。また、私自身も効果的なウォーキングの講義を受けたことで、日常生活の中に運動を取り入れるきっかけになり健康に対する関心を高めることが出来た一日になりました。体験からの学びをこれからの実習や日常生活に活かしていきたいです。



地域の暮らしを知る農業体験

2年生 みずかみ ちなつ
水上 智夏

地域・在宅看護論の授業として南丹市八木町神吉で農業体験を行い農家の方の暮らしについて学ぶことができました。夏場はビニールハウス内の気温が40℃を超えることもあり熱中症や脱水にならないために季節によって作業時間を変えておられました。私達からは脱水予防として糖分の多い飲み物を1日に多く飲むと、血糖値が高くなるリスクがあるので適度な量の補水についてお伝えしました。



お昼には神吉で採れた野菜を使った美味しいお弁当をいただきました。このような美味しい野菜を育てるために日頃から手洗いや感染症が流行っている時は人の多い場所へ行かないなど感染予防にも留意されるなど健康管理方法についてお話を聞くことができました。この学びを3年生の実習に活かしていきたいと思います。

実習での学びと国家試験に向けて

3年生 もり
森 あこ

8ヶ月の臨地実習では、患者さんの状態から必要な援助を考えるだけでなく言葉や行動から患者さんと向き合い想いを感じ援助に活かしていくことの大切さを学びました。また、入院前の患者さんやそのご家族の生活を知ることによって入院生活だけでなく退院に向けて関わることも看護であると学ぶことができました。

患者さんやご家族の方々、指導者の方々からの学びを活かして全力で国家試験に挑みたいと思います。



第61回全国自治体病院学会優秀演題選出

2023年8月31日に北海道札幌市で開催された第61回全国自治体病院学会で当院から医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、理学療法士、診療放射線技師、事務職員が16の演題を発表しました。

発表演題の一つで、片野ゆき子外来看護師が演者、共同演者が関本充代副看護部長 加地弘佳総務課長 鈴木建太郎消化器内科部長で発表した「外来看護師の業務効率化への取り組み～大腸内視鏡検査の前処置説明動画を導入して～」が優秀演題として選出されました。

近年、看護師不足が問題とされており、当院においても例外ではありません。日々、看護支援が必要な患者さんにもっと関わりたいと思っているのですが、なかなか時間が確保できないのが現実です。そこで、人材の確保が難しいのであれば、業務を見直し効率化することで、少しでも患者さんに関われる時間を確保しようと考え、今回取り組みました。

私にとって初めての学会発表でしたが、近年のデジタル化の発展もあり、他施設の参加者からたくさんの質問を受け、多くの方々に興味を持っていただきとてもうれしく思いました。

今回、この研究にお忙しい中ご尽力、ご協力頂きました皆様様に心より感謝いたします。今後も地域の皆様に良い看護が提供できるように頑張りたいと思います。

看護師 ^{かたの}片野 ゆき子



共同演者と共に

第20回日本医療マネジメント学会京滋支部学術集会

臨床工学科 ^{やぎ だいすけ}八木 大輔

2023年10月28日に第20回日本医療マネジメント学会京滋支部学術集会が開催されました。今回はCOVID-19の5類感染症移行で行動制限が解除されたことにより、現地参加による従来の学術集会が琵琶湖を望む風光明媚な長浜の地での開催となりました。

マネジメント学会とは医療におけるマネジメントについて、それぞれの病院や施設から集まった多職種の医療従事者が活発に議論をおこないます。今回の学術集会では私からは臨床工学科で取り組んだ「人工呼吸器台数の選定」について発表をおこないました。人工呼吸器は診療に不可欠な生命維持管理装置であると同時に高額な装置でもあります。更に維持をするには高額な定期メンテナンス費用が発生します。そのため、当院の現状に沿った適切な稼働率となるよう台数の削減をおこない、それに伴う経済効果について意見交換をさせていただきました。

当院からは私以外にも計良副院長、今井管理栄養士、北村理学療法士、谷理学療法士、河本看護師、地域医療連携室の中俣主査が演題を発表し、川勝看護部長が座長として参加されました。それぞれの分野のマネジメント管理に関する成果や課題を発表し、活発な議論や情報交換がおこなわれました。また、学術集会のテーマが「We Are One Team! 気持ちよく働ける職場をめざして」とあり、施設内におけるチーム医療、多職種連携の重要性を感じ、今後の業務にますます精進してまいりたいと心を新たにしました。



かかりつけ医を持ちましょう

かかりつけ医とは…

普段の健康状態を把握してくれる
もっとも身近な「主治医」のことです。
具合が悪くなったり、困ったときにはいちばんに
受診できる「かかりつけ医」を持ちましょう。



かかりつけ医についてのご相談は

総合受付①窓口

- 地域医療連携室／電話 0771-42-5061（直通）
- 受付時間／平日 8：30～17：15

看護職員募集

一緒に働く仲間、大募集
新しいこと、極めること、
仲間とともに。

看護師寮利用できます。（正職員）
月額 4,000 円（税込）



〒629-0197

京都府南丹市八木町八木上野 25 番地
京都中部総合医療センター総務課人事係
TEL 0771-42-2510(代)まで

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.kyoto-chubumedc.or.jp/nurse/>



編集後記

昨冬は 10 年に一度と言われる大寒波が襲来、
当院周辺も猛吹雪となって電車が止まり帰宅困難
となったため、私も病院で一夜を過ごしました。

今冬も寒波襲来日がありましたが、全国的な暖
冬傾向もあり雪もそれ程降らず、無事に帰宅する
ことができました。

体感的にも今冬は寒い日が少なく感じますが、
周囲では新型コロナウイルス感染症等に罹患され
た方も多いため、暖冬ではありますが体調管理に
万全を期してお過ごしください。広報委員会 Y.N.

病院スタッフはマスクとゴーグルを着用して業務を行っておりますが、
撮影のために一時的に外している場合があります。ご了承下さい。

MAP

